

し、是等も茶具に用ひし乎えらす、

茶盞、或者茶杯とも云、是も小器を宜しとす、西土明世の製造白磁なる者宜し、茶史に、蓋以雪白爲上と見ゆ、或は椀と云、鍾と云、甌と云、其形少かの異有のみ、白磁を貴むは、茶の青黄候ひやすきを以てなり、點茶家黒椀を貴むは、漚花の白色を試ん爲也、茶盞用ふる時、潔滌を専らと力むべし、茶略に、山僧迎客餉茶時、猶將濕絹向茶碗内、再三搥拭、此誠得茶中三昧者と見ゆ、茶箋には、茶具滌爭覆竹架、俟其自乾爲佳、其拭巾只宜拭外面、切忌拭内、蓋布帨雖潔、一經人手、極易作氣、縱器不乾亦無害と云り、共に深切の説也、諸書に蓋と云、杯と云、椀と云、御國には上古より椀と云しと思ゆ、大和物語に、良峯宗貞五條わたり、に雨やどりしたる家にて、あした松を蒸ものと云物にして、ちやうわんに盛て出せしを、興有事に後まで忘れかねつると云事見ゆ、茶椀をちやうわんとなふる類、そのかみの詞づかひなり、これをある人長椀と解しは、いぶかしき事也

火爐風爐、共に西土の製造佳也、効用を専らに造りたり、こゝに造れるも、かしこに象れる者宜し、茶具の圖、茶經に十二具を出し、附録に七具を見はす、遵生八牋に十六具の目見ゆ、烹點共に今は長物と思しきも、あれば擇びて取べし、必備ふべき具、

- 火爐 風爐 苦節君 茶經に圖あり、風爐を覆ふ具 湯鑪 茶瓶 茶壺 茶瓶と用者同 水注 水杓 分茶盒 茶罌 茶匙 竹或ハ銅器 茶盞 飛閣 沃盆 水曹 茶葉を洗ふ盤 受汚 納汚 烏府 降紅 團風 焙爐

小物は悉く器局に收むべし、竹籃を以て製するを都監と稱す、總て器物は分限に應じ有に任すべし、豪富の家には、珍奇を搜索めて奢靡の情を恣にす、山林の士は、新魚を嫌はず、効用清潔を専らと擇ぶべし、

〔木石居煎茶訣〕上和 こんろ 經○茶に風爐とありて、其製銅鐵泥の三通りあり、眞○眞寮には